様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１０３

研究課題名（和文）文学的言説における日中戦争前期〈中国〉表象の多角的研究

研究課題名（英文）A Multifaceted Study on the Representation of China during the Shino-Japanese War

研究代表者
松本　和也（Matsumoto, Katsuya）

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：５０４６７１９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、日中戦争前期の文学的言説において、中国というモチーフがどのように表象されていたかについて、実証的な調査・分析を行った。具体的には、尾崎士郎、小田嶽夫、岸田國士、田中英光、太宰治、川端康成、林語堂といった文学者たちによる作品、言動、受容について多角的な検討を行った。それらを積み重ねることによって、文学場における〈中国〉表象の規則や特徴を分析し、その歴史的な意味について考察した。

研究成果の概要（英文）：　I researched representation of China on literary discourses during 1937-45.　I considered behavior of a man of letters(Shiro Ozaki,Takeo Oda,Kunio Kishida,Hidemitsu Tanaka,Osamu Dazai,Yasunari Kawabata, Lin Yutang), a work and acceptance.　A regulation of representation of China and the feature in the literary field were analyzed and it was considered about its historical meaning by piling those up.

研究分野：日本文学

キーワード：報告文学（ルポルタージュ）　小田嶽夫　尾崎士郎　岸田國士　田中英光　太宰治　川端康成　林語堂

１．研究開始当初の背景

(1)　日中戦争（前）期の文学的言説に関する研究は、板垣直子『事変下の文学』（第一書房、1941）以来、少なからず蓄積されてきた。また、昭和10年代という視座をとれば、平野謙による『昭和文学史』（筑摩書房、1963）をはじめとした評論もある。

しかし、その多くは、戦時下文学の活動を戦争に伴う思想・文化統制下の「谷間」の時代の産物と捉え、国策を軸に「抵抗か、迎合か」といったイデオロギーから文学を裁断する傾向にある。逆にいえば、同時代の諸条件を考慮した多様な観点からの研究は、今後の課題として残されている。

また、日本文学と中国の関係についても、個別の作家体験については研究書がまとめられているが、昭和期以降は竹内実『日本人にとっての中国像』（岩波書店、1992）等に部分的な論及がある程度にとどまり、本格的な研究は少ない。

(2)　直接的な先行研究としては、杉野要吉編著『交争する中国文学と日本文学 淪陥下北京 1937-45』（三元社、2000）と荒井とみよ『中国戦線はどう描かれたか 従軍記を読む』（岩波書店、2007）があげられる。

前者は、日中両国文学者の言動を包括的に取り上げ、当事者の発言や初出資料の提示等も含め重要な成果であるが、そこに登場する文学者や作品自体に焦点が絞られており、それらが当時どのような意味を持ち、いかに受容されたか、さらには相互比較といった視点が不十分である。

副題通り検討対象を絞り込んだ後者においても、従軍記それぞれの書き手の体験・問題意識については豊富な情報に基づき検討されているものの、焦点が書き手に絞られた結果、個々の従軍記の社会的な位置や同時代における影響力や、中国表象の特徴等はほとんど検討されてこなかった。

２．研究の目的

本研究においては、時期を日中戦争前期（1937-41）に絞り、原則として日本人の手になる中国を表象した文学的言説を中心的検討対象に据え、それらに描かれた〈中国〉表象の多角的な分析を目指す。

盧溝橋事件以降、対米英戦開戦以前、戦時下の屈折した政治状況の中、日本人が中国をどのように認識し表象していたのかについて、そこに関わった表象の規則とともに分析する。さらには文学的言説に描かれた〈中国〉を通して、日本における〈中国〉表象の再編成の様相を明らかにすることが本研究最大のねらいであり、それはそのまま空白の文学研究（史）への重要な寄与ともなるはずである。

以上が、本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究テーマに即して、１）中国をモチーフとし、1937-1941 年に発表された文学的言説を、雑誌・新聞・単行本の調査を通じて一覧としてリスト・アップし、２）それら個々について多様な観点から分析を施し、３）その上で、文学的言説に通底する〈中国〉表象の規則を同時代の広範なコンテクストを参照しつつ明らかにし、４）それらが当時の日本における中国認識にどのような影響を与えたか、について検討する。

そのため、各種雑誌総目次や出版年鑑等を手掛かりに 1937-1941 年に刊行された文学的言説を網羅的に調査し、それらを取り巻く政治的・歴史的状況と、中国関連言説とを併せて、〈中国〉表象を軸に複数の観点から多角的に分析する。

その成果を総合しながら、日中関係再考の契機としても本研究を位置づけ、具体的な検討課題(同時期の作品やトピックなど)を各論として複数準備して多角的な研究を展開し、学会発表・論文化等を通して研究成果を公開していく。

４．研究成果

(1)　日中戦争前期の文学的言説における〈中国〉表象の分析を目指した本研究においては、戦局の進行に伴い変動していく文学場を、各論として多角的に検討するために、時系列を分節し、その時々において上記テーマが集約的に体現された具体的な検討課題を複数選び、研究を進めることとした。

以下、時期を下りながら、各論についての成果をまとめていく。

(2)　昭和 12 年 7 月 7 日の盧溝橋事件に端を発する日中戦争(本研究では、原則としてこの呼称で統一する)勃発を受けて、文学場においても時局とどのような関係性を切り結んだ文学活動を展開していくかが重要な争点となっていく。見方を変えれば、日中戦争下にあって、〈中国〉のどのような側面をモチーフとして切り取り(あるいは、黙殺し)、どのように表象するのか、そこに関わる文学者、権力の要請とはどのようなものか、といった一連の争点が、またたくまに文学場の内部から準備されていく状況が確認できる。

そうした中、昭和 12 年下半期には、両極の、しかし根を一つにした動向をみてとることができた。1 つは、〈中国〉における戦場を積極的に表象していく先駆的な報告文学（ルポルタージュ）の登場、もう 1 つは、内地の日常に間接的に関わってくる〈中国〉を、いわば消極的に表象する、中国をモチーフとした小説への期待、である。

前者については、『中央公論』から戦場に派遣された尾崎士郎を視座の中心に据えて、

前後した時期に文学場で盛んに論じられていった、広義の報告文学（ルポルタージュ）論を検討した上で、戦場としての〈中国〉を、開戦直後に書くことの意味を検討した。

その結果として、日中戦争の戦場をモチーフとした文学的言説に求められていたのは、実体験に根ざした「当事者性」と、文学者としての吟味を経た「距離」という相反する要素であったことが明らかになった。こうした、時局下の権力の要求によって、ジレンマを抱えた文学者がみせた応答の一例として、前者を優先した事例研究として尾崎士郎とその同時代評価を論文にまとめた（雑誌論文④）。

また、こうした隘路を、当初からの中国勤務体験とそれに基づく知識によって回避しつつ、報告文学（ルポルタージュ）でも戦争文学でもない、内地からみた〈中国〉を書いた文学者とそこに差し向けられた評価について、小田嶽夫「泥河」・「さすらひ」を中心とした事例研究を行った。両作品は、間接的な仕方で日中戦争を書き、しかも銃後における〈中国〉表象として、時局的な積極性ももちあわせたものとして評価されていたことを、文学場の言説分析から明るみに出し、論文化して発表した（雑誌論文⑤）。

(3)　翌昭和 13 年には、主要メディアが文学者を特派員として次々と戦場に派遣し、文学場においても報告文学（ルポルタージュ）の隆盛が、いよいよ顕在的になっていく。

そうした中、報告文学（ルポルタージュ）への要求も、時局・権力との相関関係の中で整序されてゆき、評価の網目も細分化されていく。そこで、本研究では、書き手として特異な属性を持ち、それを自作にも存分に発揮した、岸田國士とその報告文学『北支物情』・『従軍五十日』を検討対象として取り上げた。

岸田の属性としては、陸軍士官学校出身であること、後に大政翼賛会文化部部長になること、そして、昭和初年代には新聞連載長編小説の人気作家となっていたことがあげられる。そうした岸田は、戦場を訪れては軍関係のコネクションを生かしながら多様な人に会い、頻りに文化工作についての考察を展開していく。

それらをまとめた『北支物情』・『従軍五十日』は、報告文学（ルポルタージュ）一般とも文学者のそれとも、一線を画したものとして受容され、その理知に裏づけられた文学者の「眼」によって書かれた、ヒューマニズムあふれる報告文学として高く評価された（おそらくはこうした世評が、岸田を文化部長というポストを近づけていくことにもなる）。そして、こうした成果は、一人岸田のそれであるばかりでなく、「当事者性」と「距離」を要求されてきた報告文学（ルポルタージュ）の一つの到達点でもあった。

以上の議論についても、論文にまとめて発表した（雑誌論文③）。

(4)　昭和 13 年に発表された、火野葦平の「麦と兵隊」以降、報告文学（ルポルタージュ）と戦争文学とを問わず、実際に戦場で戦争に関わっている書き手による文学的言説が圧倒的な支持を得ていく中で、一方では、その模倣者があらわれもし、一方では、内地にとどまる文学者はそのモチーフ探しに困じることになっていく。

そうした、〈中国〉をめぐる戦場／内地の相剋を考える格好のケースとして、田中英光「鍋鶴」執筆・発表経緯と、同作を出版社に紹介した上で、自作の小説「鴎」で批判的に言及した太宰治との一連のやりとりに注目した研究も進めた。

当時、従軍中だった田中英光は、いわゆる戦争文学を書いて、私淑していた内地の太宰治宛て送付する。太宰は同作を雑誌『若草』に紹介し、そのことで日の目を見ることになる。ただし、テクスト自体は戦争・戦争を描くステレオタイプに過不足なく収まっており、太宰治はそのことを自作「鴎」で、戦場というモチーフの書き方として批判する。他方、戦場経験を持たない太宰自身はといえば、戦場を直接体験して書くことは当事者に任せ、内地から〈中国〉を書くことを積極的に選び、その方法論的宣言自体をもって作品としていく。

つまり、当時の文学場にあっては、〈中国〉をどこから、いかに書くか、という難問が広く共有されており、田中英光「鍋鶴」と太宰治「鴎」はそうした問題を集約的に体現した一事例と捉えることができるのだ。

そのことに、事後的に気づいた田中は、後年、自作「鍋鶴」の限界を自ら言明することになるが、当時、太宰治がとった方法は、戦場を迂回しながらも戦争にアプローチしていこうとするものであった。

ここにおいて、〈中国〉表象の方法論は、書き手の位置・条件によって、分割されたものへと整序されつつあったことが伺える。

こうした文学場の、対〈中国〉表象シフトについて、研究会での発表を経て、論文にまとめた（学会発表③、雑誌論文⑥）。

(5)　本研究では、こうした、一連の日本語の書き手による〈中国〉表象にとどまらず、中国人によってどのように日中戦争が表象されていたのか、といった角度からも考察を進めるために、昭和 15 年に邦訳が刊行された林語堂の *Moment in Peking* に注目した。

というのも、日中開戦以降、主には報告文学（ルポルタージュ）によって〈中国〉が表象されていくのだが、それは日本語の書き手によるものが大半で、中国自体を知るためには、中国人による、いわば入門書が求められていた状況があったからである。同作は、こうした当時の文学場および時局の期待・要請に応える作品であり、その終盤には、日中戦争期における中国の様子が描かれた作品でもあった。

そのいささか過剰ともいえる期待には、米国でのベストセラー現象が関わっているともみられるが、大部の作品であるにも関わらず、昭和 15 年に一挙に 3 種の邦訳が刊行されたことに明らかなように、明らかに〈中国〉への興味に後押しされたものとみてよい。

同書は、『北京の日』、『北京好日』、『北京歴日』と、タイトルも異にしながら刊行されていくが、そこには訳者などによるパラテクストが付され、いずれにおいても、中国理解のための必読書としての位置づけが明示されていく。

しかもそうした位置づけは、英語で書かれた *Moment in Peking* が、しかし中国人の手によるものだという点に、多くを拠っているはずだったのだが、邦訳の段階で、日中戦争に関する多くの削除が行われていたことが明らかなものである。もちろん、三社それぞれに、削除の度合いや、注の有無など、対応に違いはあるのだが、重要なのは、日本に都合の悪い部分を削除した本文が、当時における中国理解のための必読書（入門書にして概説書）として日本で出版され、受け入れられていった状況それ自体である。つまり、この時、操作された〈中国〉表象が、あたかもありのままの〈中国〉であるかのように表象されていくという、問題含みの事態が進行していったのだ。

これを、当時の文学場の〈中国〉表象の問題へと接続してみれば、ここには、報告文学や、内地を描いたケースと相似した表象の力学が作動していることは明らかである。つまり、〈中国〉に対する興味関心はあり、そのありのままの現状を知りたいという日本の文脈は確かにありながら、報告文学においては戦場や経験を切り取ることによって、*Moment in Peking* においては訳出時の（可視化されない）削除によって、時局下の権力も間接的に関与した表象の規則が作動し、〈中国〉表象には、明らかにバイアスがかかっていくのだ。

こうした中国の現況を描いた文学作品が翻訳される時に発動される、対〈中国〉表象シフトについて、研究会での発表を経て、論文にまとめた（学会発表①、雑誌論文①）。

(6)　最後に、以上の議論を、内容的にも時期的にも総括する意味をこめて、間接的に〈中国〉がモチーフとされた小説、川端康成「高原」連作についても研究を進めた。同作は、第一作「高原」（昭 12）、第二作「風土記」（昭 12）、第三作「高原」（昭 13）、第四作「初秋高原」（昭 14）、第五作「樅の家」（昭和 14）と、足かけ 3 年にわたって発表され、『川端康成選集　第九巻』（昭 14）おいて『高原』としてまとめられた作品である。

ただし、作中で描かれる時間は、第一・二作発表時に近接した昭和 12 年一夏の出来事に限られている。従って、連作が発表されていく間に、当初、文字通り同時代の出来事をモチーフとしてとりあげた小説は、次第に歴史に遅れていくという帰結をたどった小説でもあり、そのことと、作中のモチーフ、連作の受容には密接な関わりが見出され、注目に価する。

軽井沢を舞台とした「高原」連作には、全編を通じて間接的なモチーフとして日中戦争が書き込まれているが、その同時代受容を詳細に調査・分析すると、そこからは顕著な変化が看取されるのだ。

そもそも、「高原」連作では、軽井沢という土地が、日本にありながら日中戦争の影響を受けにくい場所として設定されている。そして、川端康成という作家も、時局にすぐさま反応するタイプの作家ではないにもかかわらず、「高原」・「風土記」が発表された昭和 12 年には、「川端が積極的に時局を題材にした話題作」としての受容が大勢を占めた。

ところが、年を経るごとにこうした要素は影を潜め、本文にも、川端のイメージにも大きな変動がないにもかかわらず、逆に小説には「美」ばかりが読まれるようになっていく。もちろん、その間、文学場では報告文学（ルポルタージュ）や戦争文学が隆盛となっていき、「高原」連作に描かれた間接的な日中戦争が、相対的にそのインパクトを減じられ、逆に審美性のみがクローズアップしていったのだと考えられる。

こうした事態の進行は、単に「高原」連作の受容変動にとどまらず、文学場の〈中国〉表象シフトの変化による帰結だと考えられる。

本研究テーマが対象とした期間をおよそカバーした本研究については、学会での発表を経て、論文にまとめた（学会発表②、雑誌論文②）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

① 松本和也、「林語堂 *Moment in Peking* 翻訳出版をめぐる言説――日中戦争期の文学場一面」、単著、『太宰治スタディーズ』、査読無、別冊第 2 号、2015 年 6 月、印刷中

② 松本和也、「川端康成「高原」連作の同時代受容分析」、単著、『国語と国文学』、査読有、第 92 巻第 4 号、2015 年 4 月、pp.52-67

③ 松本和也、「『北支物情』・『従軍五十日』の同時代評価――岸田國士の昭和一〇年代を考えるために」、単著、『立教大学日本文学』、査読無、第 113 号、2015 年 1 月、pp.50-63

④ 松本和也、「昭和一二年の報告文学(ルポルタージュ)言説――尾崎士郎を視座として」、単著、『文芸研究』、査読有、第177集、2014年3月、pp.1-13

⑤ 松本和也、「日中戦争開戦直後・文学（者）の課題――小田嶽夫「泥河」・「さすらひ」を視座に」、単著、『太宰治スタディーズ』、査読無、別冊第1号、2013年6月、pp.26-3

⑥ 松本和也、「戦場というモチーフをめぐる媒介／触発――田中英光「鍋鶴」と太宰治「鴎」」、単著、『太宰治スタディーズ』、査読無、第4号、2012年6月、pp.210-219

〔学会発表〕（計　3　件）

① 松本和也、「日中戦争期の中国文学受容一面――太宰治と中国について考えるための補助線」、単独、「太宰治スタディーズ」の会、2014年12月23日、慶應義塾志木高等学校（埼玉県）

② 松本和也、「川端康成「高原」連作から考える文学場一面」、単独、2014 年度立教大学日本文学会大会、2014年7月5日、立教大学（東京都）

③ 松本和也、「媒介する／触発される太宰治あるいはモチーフとしての戦場―田中英光「鍋鶴」と太宰治「鴎」」、単独、「太宰治スタディーズ」の会、2011 年 9 月 24 日、コラボ産学官プラザ in TOKYO（東京都）

６．研究組織
(1)研究代表者
松本　和也（ MATSUMOTO,Katsuya ）
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号：５０４６７１９８